

漫 画 家 と し て の 安 泰

佐々木 靖章*

（2002 年 10 月 7 日受理）

The Study of A Caricaturist Yasu Tai

SASAKI YASUAKI*

（Received October 7, 2002）

1 本稿の目的と安泰研究の問題点

茨城県出身の安泰（明治 36 年～昭和 54 年）は、これまで専ら童画家として評価されてきた。しかし、安泰の残した業績を断片的ではあるが一通り見渡してみると、児童雑誌や児童書に絵を描いたりカットを描いた童画家として単線的に把握するよりは、美術家として児童文化に多面的にかかわった存在として統合的に評価するべきではないかと考えるに至った。本稿ではその一つの試みとして「漫画家」、正確には「コドモ漫画家」としての安泰の実績を掘り起こして検討を加え、これまで知られていない資料も明らかにすることにより、従来の安泰像の修正を促し、今後の安泰のトータルな研究の出発点にしたいと思うのである。

なお、本稿では「コドモ漫画」を、いわゆる「童画」と関連は持ちながらも児童文化の中に独自の領域として存在する立場で基本的に稿を進める。その上で筆者は、最終的には「童画」概念を拡大し「コドモ漫画」を「童画」の一領域として改めて位置づけることには反対しない。つまり、そうした枠組みの変更により、「童画」の概念を「美術」や「絵画」という伝統的な考えの中に閉じこめ、純化するのではなく、大衆化、市民化していく日本の社会の中に置いて再定義すべきであると思うのである。それによって、安泰のコドモ漫画、大人漫画、絵雑誌の絵、単行の絵本、児童書等のカット・挿絵・装丁、双六、紙芝居等も含めた全仕事は、おのずと「児童文化（史）」の世界に収斂する方向で統合的に評価されるのが望ましいと考えるのである。

2 先行文献

安泰の基礎資料としては、安和子他編『安 泰の世界』と安和子編『安泰作品目録・略年譜』がある¹⁾。そして水戸市立博物館で「童画家安泰の世界展」が平成 8 年 10 月 1 日から同年 11 月 17

*茨城大学教育学部国語教育講座（〒 310-8512 水戸市文京 2 丁目 1-1）

日まで開催され、図録も刊行された。それを期に同博物館学芸員寺門寿明が「安泰の世界」を『茨城新聞』に平成8年10月22日から同年11月3日にかけて7回連載し、『朝日新聞』も同年10月26日に「ほのぼの懐かしい動物たち」を掲載した。

一方、本格的な研究としては金子一夫・七字純子の「童画家安泰の研究(1)、(2)」(以下2編をあわせて「金子・七字論」と言い、一編ずつを「金子・七字論(1)」、「金子・七字論(2)」のように略記する)がある²⁾。安泰の生涯を概略述べた後に、安家に残されている『仕事日誌』と『画料記録』を基に戦前の安泰の仕事を整理し、問題点を指摘しており、安泰研究の基礎を築いた貴重な論考である。本稿も基本的にはこの「金子・七字論」を研究の出発点にしている。ただ、「金子・七字論」で提示された資料の背後に隠されている作品群の量が膨大であるだけに、安泰研究者は実際安泰の作品を収集、集積すること自体が容易なことではないことに気づく。研究の抱える平凡にして危険な罫ともいえるが、資料の豊富な領域の研究は緻密、精細になり、それに比例して資料の欠ける領域や不十分な領域は研究の視野から外れていくのである。言うまでもなく、研究者は「金子・七字論」が提示している多くの雑誌や単行本などの全量精査に向けての努力を継続する一方で、それが容易には達成出来ないのが児童文化(史)研究の現実であることも否定出来ないのも、さしあたり焦点を絞って考察するしかない。そうして断片的な考察を集約して全体に迫るしかないのである。

その他にも問題はあつた。『仕事日誌』と『画料記録』に記録されていない昭和5年以前の仕事(『コードモノクニ』以外の)の探索、昭和5年以降で両資料に記録されていない仕事の探索、双六等の付録の探索などである。また、『コードモノクニ』などの絵雑誌や低学年向け児童雑誌は、一冊が三部分から構成されているという特殊形態を知っておく必要がある。第一の部分は厚紙刷りの本体(以下「本冊」という)、第二の部分は薄紙刷りで「本冊」の主に巻尾に挟み込まれたり貼付されている物で、「付録」と記名されることもある(以下「挟み込み」という)、第三の部分は、双六や組立模型のように「本冊」とは別に添付された物である(以下「別添付録」という)。安泰の作品はこの三部分の内のどこにどのような形態で掲載されているのか一つ一つ確認する必要がある。作品の価値は別として、掲載場所によって作品の描き方や内容が制約されるからである。モノクロかカラーかも特に絵雑誌の場合無視できない。通常、絵雑誌の主役はカラー印刷された「本冊」ではあるが、「挟み込み」は普通モノクロ印刷でありながら多くの機能を負わされている³⁾。そこにはカットや挿絵もあり、創作童話、各種の読み物、保護者へのメッセージ、「本冊」掲載童話の楽譜、その童話の舞踊の振付、選者の選評を含む投稿欄や読者欄などが掲載されており、情報量が多く研究には欠かせない部分である。しかし、「挟み込み」は失われて見るのが困難な場合も多い。今後の安泰研究の深化はそうした問題もクリアしながら辛抱強く丹念に進める必要がある。

3 安泰とコードモノ漫画

そうした安泰研究の困難さを承知の上で、本稿では幾つかの資料を基にして安泰の「漫画」なんかなく「コードモノ漫画」を取り上げて安泰像を再検討してみたいと思う。「金子・七字論」にも漫画についての情報は含まれている。「金子・七字論(1)」では日本美術学校在学中に「この他に『教育評論』という雑誌の風刺漫画を描いたりもした」と、上笙一郎『聞書・日本児童出版美術史』か

ら引用しており⁴⁾、「金子・七字論(2)」でも「新ニッポン童画会」結成以降のスタイルの一つとして『コドモノクニ』における「漫画的なもの」を指摘し⁵⁾、更に昭和5年9月から昭和15年までの単行本における特徴の一つとして『オサルノコヅツミ』に代表される漫画を指摘している⁶⁾。また、本文中では指摘していないが、「金子・七字論(1)」の「表1 戦前における安泰の単行本の仕事一覧」の中には、昭和7年の箇所『科学漫詩』と『マンガワイソップ』が、昭和9年の箇所に『漫画独習本』が掲げられているのも見逃せない⁷⁾。

このように漫画という言葉が安泰の仕事の中に散見する背景として、大正末から昭和初期における漫画の置かれた位置を知る必要がある。その象徴的な事例として中央美術社から昭和3年に「現代漫画大観」全10巻が刊行されたことを挙げたい。所謂円本の一つである。内容見本を見ると全6冊となっており、人気が出て4冊追加したと思われる。各巻の題名と編者は下記のとおりである。

- 第一編 現代世相漫画（代田収一編）
- 第二編 文芸名作漫画（同上）
- 第三編 漫画 明治大正史（代田周一編）
- 第四編 コドモ漫画（田口鏡次郎編）
- 第五編 滑稽文学漫画（代田収一編）
- 第六編 東西漫画集（同上）
- 第七編 日本巡り（田口鏡次郎編）
- 第八編 職業づくし（同上）
- 第九編 女の世界（同上）
- 第十編 近代日本漫画集（同上）

この中に『コドモ漫画』が一巻として加えられている事は、当時子供対象の漫画が相当の歴史を持ち、市民権を獲得していた何よりの証拠となろう⁸⁾。内容見本の『コドモ漫画』の項目の説明には「すべてのコドモの楽天地だ。コドモの生活、コドモのよろこぶ相手、有益なるものが無数に掲げられる。絵の数だけでも五百以上に達する。大人も一しよに御覧なさい、面白いことかぎりなしだ。この本一冊あれば黙つてゐて優に一日子供が遊ばせられる。」とある。

収録作家は下記の18人である。

岡本一平	池部釣	牛島一水	前川千帆	田中比左良	宮尾しげを
代田収一	中島六郎	水島爾保布	安本亮一	清水対岳坊	服部亮英
阪本牙城	細木原青起	藤本斥夫	大森ひろむ	小林克己	小山内宏

全体として大人向けの漫画と同様長い説明文が付いており、内容見本の宣伝文もそれを踏まえた上で「絵の数だけでも五百以上」と大人漫画とは異なるコドモ漫画の特徴を強調しているのである。大人漫画は説明の文章（「漫文」という言い方もあった）のついた漫画、筆者に言わせれば「読み物漫画」が主流であった⁹⁾。この中央美術社の『コドモ漫画』の巻頭部分には池部釣の四コマ漫画10ページ分を含む絵を主体にした漫画を64ページまで載せており、その後のコドモ漫画の方向が編者に

よって示されているとも考えられよう。全体の内容の紹介と分析は省くが、宮尾しげをがロシアのマルシャーク作「まぬけな小鼠」（ロシアの昔話と思われる）を訳してオリジナルな絵を描いたり、アヤトリにおける「ゆびぬき」や「紐ぬき」などの遊びを図解するなどコドモ漫画の場を巧みに利用して新機軸を出しているのは注目される。しかし、全体としてはコドモ漫画の世界は大人の漫画、「読み物漫画」の形式を踏襲していると言えよう。

昭和初期における漫画の歴史を考察する上で、特に安泰との関連において忘れてはならないのはプロレタリア美術運動において漫画の果たした役割である。ここでは詳述する紙数を持たないが、基本文献として岡本唐貴・松山文雄編著『日本プロレタリア美術史』がある¹⁰⁾。その中に、まつやまふみお「プロレタリア漫画小史」が収められており、冒頭で松山は「漫画という芸術は、どのジャンルの美術にもまけない批判性と大衆性と機動性をもっているところから、直接政治闘争に結びついて、その時代の尖兵となっていることがわかる。」と端的に位置づけている¹¹⁾。松山の作品は『コドモノクニ』の童画を出発点にしていることもありコドモ漫画にも力を注ぎ、昭和7年に安泰等と「新ニッポン童画会」を結成したことは安泰漫画理解の重要因子であることは言うまでもない。

もう一つコドモ漫画の発展を考える上で見逃せないのは、新聞掲載の漫画である。漫画の隆盛と新聞との関係は多く論じられているが、コドモ漫画も例外ではなかった。絵雑誌や児童雑誌、少年少女雑誌や婦人雑誌への漫画、あるいは漫画的作品の掲載は大正末から昭和初期にかけてかなり一般化していたと思われ、それは並行して新聞にも及び、中央紙のみならず地方紙でも積極的に採用されていたと思われる。その傾向は各紙が婦人欄（家庭欄）や子供欄を常設するようになったこととも連動している。

4 『いはらき』の連載コドモ漫画

水戸市で発行されていた新聞『いはらき』に、昭和8年から10年にかけてコドモ漫画が連載された。ここには「安泰」「コドモ漫画」「新聞（地方紙）」「安泰の郷土茨城」という4要素が見事に集約されているのである。昭和8年10月17日『いはらき』夕刊（実際の発行は10月16日、以下同様）第一面に図Aのような記事が載った。そこに「児童漫画／予告／連続漫画／カンカラ勝ちやん／日本児童漫画家協会会員合作」というタイトルで、次のような解説がある。

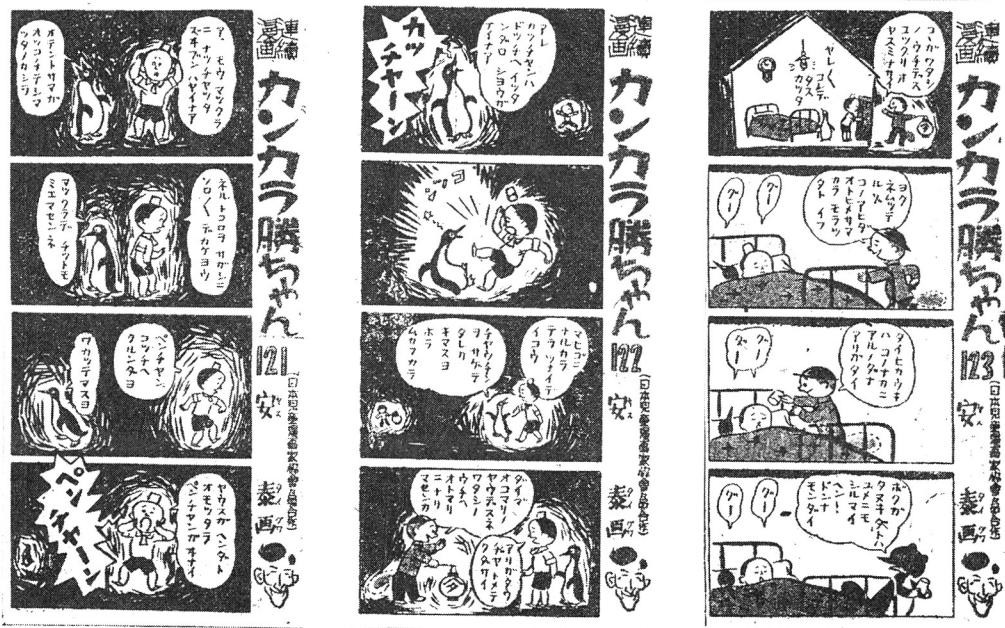
「このたび、日本児童漫画家協会の愉快的な先生方が『カンカラ勝ちやん』といふ、すばらしく面白い児童漫画をお書き下さい。この漫画は、左の十二名の先生方が、勝ちやんといふ少年を主人公にして、十五回分づゝかはるがはるお書きになる、珍らしい続き漫画であります。児童諸君に既におなじみの一流大家が、こんなにも大勢で、力を協せてお作りになつた漫画は、日本にはまだどこにもありません。諸君が今までに御覧になつた、どの漫画よりも面白くて、為になる漫画であります。どうぞ御愛読下さい。」

そして、各人が描いた当人の似顔絵付きで12人が読者へのメッセージ（構想しているストーリーや一般的な抱負）を一言ずつ載せている。担当作者は次のとおりである。

図A 『いはらき』昭和8年10月17日（夕刊）



図B-1 『いはらき』昭和9年3月24日、25日、27日（夕刊）



中野正治	長崎抜天	川原久仁於	河盛久夫	明石精一	井元水明
岡健児	杉田三太郎	安泰	島田啓三	田河水泡	広瀬しん平

安泰のメッセージは「勝ちやんは僕達と同じやうに健康で朗かです。まだ何をするかわからないがペンギンさんと二人でうんと皆さんを、笑はせるでせう。」というものである。図Aにも描かれているように、主人公は男の子の勝ちちゃんと相棒の「ペンギンテウ」（二人目の川原くになが、連載20回目で「ペンチャン」と名前をつける）が繰り広げる愉快な冒険物語である。連載の四コマ漫画の形式をとり、夕刊の第一面、題字の下部に掲載された。各作者の担当回と掲載期日を次に掲げる。署名は原表記のまま。「～」の間の夕刊に15回掲載されたことを示す。

ナカノ・マサハル	1～15	昭和8年10月19日～11月5日
川原くになが	16～30	昭和8年11月7日～11月23日
ながさき・ばってん	31～45	昭和8年11月25日～12月12日
河盛久夫	46～60	昭和8年12月13日～昭和9年1月11日
明石精一	61～75	昭和9年1月12日～1月28日
スギタ・サンタロー	76～90	昭和9年1月30日～2月15日
井元水明	91～105	昭和9年2月16日～3月4日
岡けんち	106～120	昭和9年3月6日～3月23日
安泰	121～135	昭和9年3月24日～4月11日
島田啓三	136～150	昭和9年4月12日～4月28日
広瀬しん平	151～165	昭和9年4月29日～5月12日
田河水泡	166～180	昭和9年5月13日～5月30日

このように『いはらき』に掲載された12人の集団による「カンカラ勝ちやん」は、他の地方紙にも同時期に掲載されていると思われる。時事ニュースや連載小説のほかにも、文芸欄などの署名いりの文章も電報通信社などをとおして各地方紙が共同購入していたから、この種の漫画も同様の扱いであったと推測される。それにしても同一のキャラクターを用いて12人が連続して描いていくという、一種のオムニバス方式の漫画様式はこれをもって始まりとするのであろうか。日本児童漫画家協会は昭和8年に結成された集団で、この12人を眺めると、活動歴には差があるが明治30年代生まれの連中が集っていたようだ。「金子・七字論」では、昭和7年結成の「新ニッポン童画会」のことしか触れていないので、日本児童漫画家協会に安泰が加入していたという記録は『仕事日誌』には載っていないのであろう。島田や田河のように今日でも著名な作者もいるが、『日本児童文学大事典』を引いて見ると、岡、杉田、広瀬はどこにも記載されていないし、明石は「要調査人名一覧」に載り、井元は生年不詳、河盛はかかわった単行本は索引から知ることができるが立項されていない¹²⁾。

安泰と日本児童漫画家協会との接点はどのようにして生じたのであろうか。普通は漫画家同士の繋がりと考えられる。一方、田河と川原が同じ日本美術学校の出で安泰とは同窓、川原は専攻も同じ日本画科であるという事も関係しているかもしれない。ともかく、安泰は夕刊紙面にコドモ漫画

を連載するという形で郷里茨城に久しぶりに姿を現した、ということになる。安泰自身それを知っていたかどうかは分からない。安泰の描いた15回全部を図B-1～5に掲げる。

ストーリーを簡単に紹介する。カンカラの帽子を被った勝ちちゃんは、ペンギンのペンチャンと暗闇をさまよううちに狸に騙されて龍宮の乙姫様から貰った鯛飛行機を盗まれる。やがて狸と仲良くなり、今度は協力して襲ってきた狼を追いかえす。二人は鯛飛行機で空高くあがって三日月で遊んでいるうちに鯛飛行機に逃げられる。代わりに仙人からどこにでも行ける自転車をもらってあちこち飛びまわり、その自転車も見失ってしまう、というところで終わる。

同じキャラクターを使用し、ストーリーも連続性を持たせる必要があるので、一人一人の漫画家の個性を発揮するには困難な面もあり、作家によっては無理なストーリー作りもしているが、細部を比較してみると各作家がそれだけ自分好みの描き方をしているのが分かる。安泰の勝ちちゃんも、顔の輪郭の描き方、口や目や眉毛の描き方、とりわけ横顔を描くとき鼻を尖らせる特徴がすでに明確にでていいる。15回のうちに脇役として狸、狼、象、ライオン、キリン、シマウマなどの動物を書きこんでいるのも、安泰らしさを遺憾なく発揮しているといえよう。勝ちちゃんとペンチャンがお腹がすいたので食べ物に化けてくれと狸に頼み、狸が化けた食べ物を二人が食べようとすると、狸が「タペラレテハイノチガナクナルカラコマリマス」と言い、勝ちちゃんが「ナルホドソレモサウダ」と諦めるところなどに安泰らしい優しさが滲みでている。狼を追いつ返すために狸が大砲と弾丸に化け狼は退散しかかるが、発射した弾丸が狼に命中して狸に戻ったのに気づいて正体がばれるところなどはユーモラスに描かれている。最後に仙人からもらったどこでも走れる自転車で行った所がアフリカらしく、ライオンに飛びかかれ、キリンの脚の間を走り抜け、シマウマの群れの頭上を快走する場面も安泰らしい爽快なイメージの喚起力を証明している。この種の漫画は「コドモ動物漫画」という言い方ができるかもしれない。また、勝ちちゃんの会話に「チョツトケンブツシテキヨウ」と茨城弁が使用されているのもおもしろい。ちょうどこの頃は、安泰のそれまでの仕事の集大成としての意味を持ち、しかも生涯の傑作の一つでもある『マンガワ オサルノコゾツミ』の刊行を間近に控えており、漫画作者として油が乗っていた時期であった¹³⁾。

さて、『いはらき』昭和9年3月2日(夕刊)の第3面に「?はめぐる」という題で18コマの漫画が掲載されている。中身は「味の素」の宣伝広告である。商品広告として漫画を利用したケースとして注目される。作者は「新漫画派集団合作」とある。この団体は昭和7年に横山隆一らが結成した新進の漫画家集団で、「集団で仕事の注文を大量にとって、事務所を構え組織的にこなしてゆくなど(略)マスコミに即応した姿勢をうち出すなどして、漫画の新時代来るといふ印象を強くアピールした」という¹⁴⁾。「味の素」の漫画広告もそうした集団に相応しい仕事である。同じ広告は他の地方紙にも掲載されていると思われる。味の素が漫画広告を始めたのは更に遡るようだ。

ついでに、「カンカラ勝ちちゃん」連載終了後の『いはらき』のコドモ漫画の掲載状況を簡単に報告しておく。「カンカラ勝ちちゃん」が終わった翌日、昭和9年5月31日から「六人連作」という形で「日の丸孫悟空」の連載が開始され、同年10月19日まで続く。次にその概要を「カンカラ勝ちちゃん」と同じ要領で掲げる。

島田啓三	1～10	昭和9年5月31日～6月10日
河盛久夫	11～20	昭和9年6月12日～6月22日

図B-2 『いはらき』昭和9年3月28日、29日、30日（夕刊）



図B-3 『いはらき』昭和9年3月31日、4月1日、3日（夕刊）



明石精一	21 ～ 30	昭和9年6月23日～7月4日
中野正治	31 ～ 40	昭和9年7月5日～7月15日
井元水明	41 ～ 50	昭和9年7月17日～7月27日
川原くにを	51 ～ 60	昭和9年7月28日～8月8日
島田啓三	61 ～ 70	昭和9年8月9日～8月19日
河盛久夫	71 ～ 80	昭和9年8月21日～8月31日
明石精一	81 ～ 90	昭和9年9月1日～9月12日
中野正治	91 ～ 100	昭和9年9月13日～9月23日
井元水明	101 ～ 110	昭和9年9月26日～10月6日
川原久仁於	111 ～ 120	昭和9年10月7日～10月19日

一人が10回ずつ各2回担当し、120回の連載で終わっている。コドモ漫画の連載と継続性の点から孫悟空というテーマは恰好のものであった。「カンカラ勝ちやん」のグループ12人の中から、長崎拔天、杉田三太郎、岡健児、安泰、広瀬しん平、田河水泡の六人が抜けている。その理由も日本児童漫画家協会との関係も不詳である。

続いて「十人連作」という形で「エンヤラあり助」が以下のように連載された。

吉永哲男	1 ～ 15	昭和9年10月20日～11月7日
広瀬しん平	16 ～ 30	昭和9年11月8日～11月25日
小川哲男	31 ～ 45	昭和9年11月28日～12月14日
タシロ・ヒデ	46 ～ 60	昭和9年12月15日～昭和10年1月13日
森熊猛	61 ～ 75	昭和10年1月15日～1月31日
深谷亮	76 ～ 90	昭和10年2月1日～2月19日
岡けんぢ	91 ～ 105	昭和10年2月20日～3月8日
春川卓二	106 ～ 120	昭和10年3月9日～3月27日
弓田宇左郎	121 ～ 135	昭和10年3月28日～4月16日
川原くにを	136 ～ 150	昭和10年4月17日～5月4日

「カンカラ勝ちやん」「六人連作」とメンバーが大幅に入れ代わっている。初登場は吉永、小川、タシロ、森熊、深谷、春川、弓田の7人。「六人連作」から漏れて復活したのは岡と広瀬の二人、川原一人は「カンカラ勝ちやん」「六人連作」「十人連作」と連続登場である。「エンヤラあり助」の題名からも分かるように蟻を主人公にした話である。これをもって『いはらき』の合作漫画は終わり、昭和10年5月7日からは、御村凡太郎の「オンペイ画日記」の連載が始まる。

当時の漫画ブームを象徴する事業が『いはらき』紙上で実施されたことを紹介する。同紙の昭和9年11月28日の朝刊に「本紙新年号募集／文芸並に読物懸賞課題」というタイトルの記事が一面中央に掲載された。募集の中身は「第一募集『文芸』」「第二募集『積木細工』」「第三募集『我が青年団の施設』」とあり、最後に「第四募集『漫画と其の案』」が含まれているのである。そして、昭和10年1月1日、新年の第十面にその結果が発表されている。入選の一等と二等が内容から見て

コドモ漫画と見られ、コドモ漫画隆盛を裏付けていると思われる。

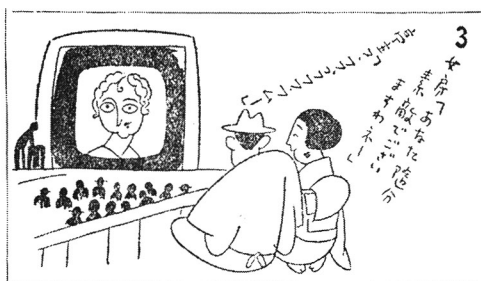
5 安泰初期の作品

次に、昭和5年以前の安泰の初期の作品について考察する。前述のように、安泰に残されてあった『仕事日誌』と『画料記録』は昭和5年から記録されており、それ以前の、言わば童画家として駆け出しの頃の仕事は『コドモノクニ』を除くと分明ではない。作家の最初期の創作の履歴は、研究上見逃せないのである。筆者が水戸市立博物館で安泰展を観たあと初めて安泰作品に遭遇したのは、コドモ漫画でも絵雑誌でもない、『古今桃色草紙』という昭和初期に発行された雑誌の中に見つけたのである¹⁵⁾。同誌第1巻第7号(昭和3年12月)に図C-1のような作品が掲載されており、「漫画」というタイトルが付されている。青山俊文二の「街上風物譚」の下部の4ページにわたり、一組の男女が新婚生活を経てやがて子供を沢山かかえて苦勞する様子が文章入りで4コマに描かれているのである。青山は当時の同誌の編集者。続いて第2巻第1号(新年号、昭和4年1月)には図C-2のように「漫画 銀座土人」が上部に文章をいれて、1ページ全体のスペースを使用して載っている。銀座を闊歩するモガ、モボが3、4年後には衣類を脱ぎ捨てて食人種同様の裸同然の恰好で歩くだろう、との未来予測図である。背景に書きこまれたカフェーは「ゴリラ」と言う名称を与えられている。第2巻第2号(昭和4年2月)には図C-3～4のように「山の恋と川の恋」(「漫画」という表題は目次による)と題して、「漫画 銀座土人」と同様の形で今度は2ページにわたり掲載された。若い男女の密会2態を山と川を場面にしてユーモラスに描き分けている。現代艶笑譚である。

『古今桃色草紙』は題名からして、当時流行のエログロ、ナンセンス雑誌の一種と見なされる。しかし、国の言論統制の強化にともなって一部の芸術家は、あえてエログロ、ナンセンスを装いながら表現活動を続けていた。その種の雑誌の先駆けは『文芸市場』(大正14年11月～昭和2年10月、復刻版がある)である。その他に、一般的に注目されているのは『グロテスク』(昭和3年10月～)、『犯罪科学』(昭和5年6月～)、『犯罪公論』(昭和6年10月～)などであり、『漫談』(昭和5年3月～)を加えることもできよう。やや特殊ではあるが内容的に意外と情報量の多いのは楨本楠郎の寄稿していた『性文学』(大正15年12月～、後に『恋愛時代』、その後『情調』と改題)や前衛芸術家の峰岸義一主宰の『芸術市場』(昭和2年3月～、後に『カメレオン』と改題)であろう。『古今桃色草紙』もその種の雑誌の一つで、第2巻第2号と第3号は村山知義の表紙絵(両号とも同じ)を用いたり、野川隆、南江二郎、綿貫六助等の寄稿を得ている。「カンカラ勝ちやん」を共同執筆した杉田三太郎が「漫文／漫画」を描いているのも注目される。安泰の作品は『古今桃色草紙』の大衆性にあわせながらも墮することなくホノボノとした雰囲気漂わせていることがわかる。

次に昭和5年の刊行でありながら、時期が早かったためか『仕事日誌』から漏れたと思われる作品がある。箱入りの『日本一のオミヤゲ文庫／幼年エバナシ教科書』全6冊である¹⁶⁾。3冊を安泰が、他の3冊を黒崎義介が担当している。絵や文章だけではなく1冊の構成を全体的に行っているとも見られるので、安泰初期の傾向、技量を判断する恰好の資料となろう。本稿では紙数に余裕がないので、簡単な紹介にとどめる。安泰担当の3冊の表題は下記のとおりである。

図C-1 漫画 結婚生活 ^{はじめをわり} 始 終（『古今桃色草紙』昭和3年12月）



図C-2 漫画 銀座土人（『古今桃色草紙』昭和4年1月）



図C-3 山の恋と川の恋（『古今桃色草紙』昭和4年2月）



図C-4 山の恋と川の恋 (『古今桃色草紙』昭和4年2月)



図D-1 フシギナオ話



図D-2 メヅラシイオ話



図D-3 カゾヘカタノオ話



エバナシ／教科書／フシギナオ話	幼年理科書
エバナシ／教科書／メヅラシイオ話	幼年地理書
エバナシ／教科書／カゾヘカタノオ話	幼年算術書

各冊の第1ページと裏表紙を図D-1～3に掲げる。箱のデザインも安泰と思われる。「幼年理科書」として編まれた『フシギナオ話』の構成は以下のとおり。基調色はオレンジ、それに黒と赤を使用。〔 〕内は筆者の注記で、主に動物が登場する単元に「動物」と記した。

- 一、アウム ト ニハトリ〔動物〕
- 二、ギユウニユウ ト オサカナ〔動物〕
- 三、デンキ ト ハリガネ
- 四、ジエイ オウ エイ ケイ
- 五、キシヤ ト キセン
- 六、ヒカウキ ト ヒカウセン
- 七、トリ ト ケモノ〔動物〕
- 八、ウミ ノ ダウブツ〔動物〕

「幼年地理書」として編まれた『メヅラシイオ話』の構成は以下のとおり。基調色は青色、それに黒と赤を使用。

- 一、ニジユウバシ
- 二、キシヤ ニ ノツテ
- 三、キセン ニ ノツテ
- 四、アツイ アツイ クニ〔動物〕
- 五、サムイ サムイ クニ〔動物〕
- 六、メヅラシイ ヒト
- 七、ニホンノメイシヨ
- 八、セカイノメイシヨ¹⁷⁾

「幼年算術書」として編まれた『カゾヘカタノオ話』の構成は以下のとおり。基調色は黄色、それに黒と赤を使用。

- 一月 オシヤウガツ
- 二月 ユキダルマ
- 三月 ヒナマツリ
- 四月 オハナミ
- 五月 オセツク
- 六月 オホシ ト ホタル

七月 タナバタ
 八月 カイスキヨク
 九月 アキマツリ
 十月 エンソク〔動物〕
 十一月 カンペイシキ
 十二月 クリスマス
 〔カゾヘカタ〕〔裏表紙〕

『コドモノクニ』で鍛えていたこともあろう、全体として均整のとれたすっきりとした構成で、人物・動物・建物・乗物等の基本型もほぼ出来上がっており、安泰の個性が整いつつあることを教えてくれる。背景とか枠の基調色として黒色系と赤色系の2色を用いて仕上げているのも印象的である。ただ、この技法は安泰独自のものではないようで黒崎義介も用いており『幼年エバナシ教科書』6冊に共通している。いずれにしても、この3冊も初期安泰研究においては見逃せない資料となりそうである。

本稿はひとまずここで終わる。漫画家としての安泰研究を進めるには『マンガワ オサルノコヅツミ』を、その名のとおりの漫画ーコドモ漫画として考察しなければならない。それは次稿で行いたい。

注

- 1) 安和子他編『安 泰の世界』（「安 泰の世界」を刊行する会、1992年10月）。
 安和子編『安泰作品目録・略年譜』（1996年、筆者未見）。
- 2) 金子一夫・七字純子「童画家安泰の研究（1）、（2）」『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学、芸術）』第42号、第43号、1993年3月、1994年3月。
- 3) 絵雑誌の「挟み込み」については、拙文『日本児童文学大事典』を読む（1）、（2）」『日本古書通信』第778号、第779号、1994年5月、6月）で特に『キンダーブック』の「挟み込み」について考察している。
 また、そこでは指摘しなかつたが『コドモアサヒ』の「挟み込み」には「カティノシンブン」と表題が付いている。
- 4) 130頁。
- 5) 76-77頁。
- 6) 85頁。
- 7) 142頁。
- 8) 「現代漫画大観」第四編の題名は、内題は扉をはじめすべて「子供漫画」、箱も「子供漫画」、内容見本や本冊の背表紙には「コドモ漫画」とある。本稿では「コドモ漫画」の表記を使用する。昭和3年6月5日発行。昭和3年11月15日発行の「第二期／（第四回配本）」と奥付に印刷された物がある。販売が好調で再販したのである。
- 9) 大杉栄著／望月桂画『漫文漫画』（アルス、大正11年11月）がある。
- 10) 岡本唐貴・松山文雄編著『日本プロレタリア美術史』（造形社、1967年9月）。
- 11) 103頁。
- 12) 『日本児童文学大事典』全3巻（大日本図書、1996年10月）。
- 13) 安泰『マンガワ オサルノコヅツミ』（発行所 コドモノクニ／発売所 東京社、昭和9年10月）。

- 14) 佐藤忠夫「漫画」の項目（『日本近代文学大事典』第四巻、講談社、昭和52年11月）、492頁。
- 15) 『古今桃色草紙』は昭和3年7月創刊され、昭和4年4月発行の第2巻第3号まで全9冊を確認。昭和4年3月は休刊。
- 16) 東京 幼年教育研究会著『日本一のおミヤゲ文庫／幼年エバナシ教科書』（東京 文教書院／大阪 宝文館 発売、昭和5年6月、18.9×12.9cm）。学齢期前の幼児向けの教科書である。筆者所蔵本には戦前の東京中野区の幼稚園の印が押してある。
- 17) 原文は「セカイノメイブツ」、目次により訂正した。

＊安和子他編『安 泰の世界』と水戸市立博物館発行の図録は一々断らなかったが、本稿において随時参照した。

＊付記 筆者の安泰研究は、平成13年度茨城大学教育改善推進費による総合研究プロジェクト「茨城地域の文化的・総合的研究－『茨城学』の発展に向けて－」の一環として行われ、その一部はシンポジウム「『茨城学』を深く、広く」（平成14年3月9日、茨城大学地域総合研究所に開催）において「安泰 初期の世界の一側面－『漫画家』としての－」と題して発表した。本稿の一部はシンポジウムでの発表に基づいている。

なお、安泰の作品掲載にあたっては著作権継承者である安和子氏の下承をえた。また、茨城新聞社の了解もえた。『いはらき』の閲覧、複写は茨城県立歴史館所蔵の複製版を利用した。あわせてお礼を申し上げる。

印刷は本来縦書きにすべきと思うが、パソコン処理の関係上筆者の都合で横書きとした。